

インフィニット・イフ・ストラトス 我輩は猫では無い

銭湯妖精 島風

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気持ちよく惰眠を貪っていたら病院に居て何か自分の記憶は無いし、なんで病院に居るか覚えて無いし、わけわかめな主人公の、お話で

見切り発車で、温めていたネタをグダグダと書いて行きたいと思いません

お目汚しとなりますが、宜しくお願い致します

プロフを編集して再投稿しました

色々ご指摘が有りましたので、近日中に暇を見つけて一度編集作業をしたいと思えます

ご容赦下さい

TS一夏ちゃん無双作品を書きたいので

仕事の関連で、こちらの更新を土日になります、よろしくお願ひします

# 目次

## IS学園入学前

1話 ふーあむあーい から始まるナンタラカンタラ 1

1

2話 ふーあむあーい から始まるナンタラカンタラ 2 | 4

3話 ふーあむあーい から始まるナンタラカンタラ 3 | 6

4話 ふーあむあーい から始まった後のナンタラカンタラ 1

8

5話 ふーあむあーい から始まった後のナンタラカンタラ 2

10

6話 ふーあむあーい から始まった後のナンタラカンタラ 3

12

7話 ふーあむあーい なワタシと束さん とアノ娘 1 | 14

8話 ふーあむあーい なワタシと束さん とアノ娘 2 | 16

9話 ふーあむあーい なワタシと束さん とアノ娘 3 | 18

10話 ふーあむあーい なワタシと束さん とアノ娘 4

20

11話 ふーあむあーい なワタシと真夏と親友と 22

IF話 ふーあむあーい だった私と彼の未来の話 24

12話 ふーあむあーい なワタシとナントカヤラ 1 | 27

13話 ふーあむあーい なワタシとナントカヤラ 2 | 29

14話 ふーあむあーい なワタシと受験戦争 1 | 31

15話 ふーあむあーい なワタシと受験戦争 2 | 33

16話 ふーあむあーい なワタシと受験戦争 3 | 35

## IS学園入学後

17話	ふーあむあーい	なワタシと親友♂の高校デビュー	1	37
18話	ふーあむあーい	なワタシと親友♂の高校デビュー	2	40
19話	ふーあむあーい	なワタシと親友♂の高校デビュー	3	43
20話	ふーあむあーい	なワタシと親友♂の高校デビュー	4	45
21話	ふーあむあーい	なワタシと親友♂の高校デビュー	5	47
22話	ふーあむあーい	なワタシと親友♂の高校デビュー	6	49
23話	ふーあむあーい	なワタシと親友♂の高校デビュー	7	51
24話	ふーあむあーい	なワタシと親友の準備期間	1	56
25話	ふーあむあーい	なワタシと親友の準備期間	2	53

## IS学園入学前

1話 ふーあむあーい から始まるナンタラカンタ  
ラ 1

ふと気付けば、フワフワと水面を漂う様な、何かに優しく包まれている様な、そんな不思議な感覚を長い時間堪能していた様な気がする心地良すぎて墮落しきってしまう微睡みから勝手に引き上げられて眼を覚ます

まず見えたのはシミの無い天井だった

「・・・知らない天井だ」

ピッピッピッと一定のリズムを刻む電子音、少し首を動かせば見える点滴とソレを吊るすアレ、そこから伸びる管の先は自分へと向かっている

「病院・・・？でも、なんで・・・」

疑問を抱き思考するが、答えが出ない

寧ろ、問題が思考を支配し始める

「・・・名前・・・何だっけ？誰だっけ？」

此処が病院なのは分かる、理解した

だが、自分が何者で何故、此処にいるのかが分からない

「拉致られて人体実験のモルモットに、とか？・・・ないか」

可能性は0では無いが、限りなく0に、近い・・・筈

無いと思いたい

それから身体を起こし、辺りを見回して状況を確認する

「右から反時計に・・・心電図モニター、点滴と台、白のカーテン、外開きの窓、洗面台、薄いテレビ、出入り口の扉、椅子が三脚、ロッカー、か・・・」

なんか足りない気がするけれど、まあいいか

取り敢えず心電図の電極を外しベッドから降りて洗面台へ移動しようとしたが、長い間ろくに身体を動かしていなかったのか、イメー

ジに身体がついて行かずに少しよろけてしまったが、咄嗟に壁に手を着き体勢をとる事が出来た

これは自分の思う様に身体を動かすにはりハビリを頑張らないと行けない、と理解する

それは一先ず放置して、洗面台の前に移動し、鏡を見る

其処には、紅く肩甲骨を越す程度の長い髪と、より深い紅く角度によつては赤茶の色をした瞳、見た印象は14〜16の間、入院着を着ていて、ダボつとしているからか少し分かり辛いが2つの胸の膨らみ  
どうやら自分は女の子らしい、ひとまずワタシとしておこう

「自分の顔を見たら思い出すと思っただけど・・・ダメか」

これは物凄く面倒な事になった・・・これでは家族の有無も確かめる手立てが限られてしまう

ろくな自由も利かない身体で、この病室を出た所でやれる事は少ない  
モルモットの可能性が0じゃ無い以上、ヘタに動くのはマズいだらう

今更だが、心電図の電極を外したから滅茶苦茶五月蠅い

取り敢えず、ベッドに戻り電極を付け直そうと試行錯誤をしていたら、音を聞きつけた医者と看護師が扉をやや乱暴に入ってきて来て、思いつきり目が合ってしまったので

「あ、すみマセン・・・間違えて引っこ抜いちやつて・・・」

うつかりを装い言つて見ると、医者は看護師に指示を出し、テキパキと心電図モニターを止めたり色々として、医者がカルテ的なのを看護師から受け取り、ワタシを診察し始める

「此処が何処か、分かるかな？」

「見た感じ・・・病院、その個室ですね」

ワタシの答えに軽く頷き、医者は再び口を開く

「自分の名前を言えるかい？」

その質問に対し、今一度自問自答してみるが、やはり答えが出ず  
「分かりません、自分は誰で、何で病院に居るんですか？」

ワタシは医者に掴み掛からんばかりに、縋る様に尋ねる

「君は、ある事故に巻き込まれて今日まで眠っていたんだ。名前が思い出せないのは事故の後遺症かもしれない、恐らく一過性の物だから怖がらなくて大丈夫だ」

流石医者と言うべきか、取り乱したワタシを安心させてくれた

「先程、君のご家族に連絡をさせて貰ったから、時期に来ると思うから、少し待っていてね？五反田さん」

ナニこの医者イケメン!!

危うく惚れてしまう何処だった・・・ふう

## 2話 ふーあむあーい から始まるナンタラカンタ ラ 2

イケメンな医者に安心させられて小一時間程、雑談という名前の問診をされていると、やや乱暴に病室のドアが開きワタシ目掛けて自分と瓜二つとは言わないまでも、似ている少女が半泣きな状況で入って来た

「お姉!!」

医者が直様道を開けると、少女はワタシへ抱き着き泣き始めてしまったので、取り敢えず少女の頭を撫でておく

記憶は無くとも魂と身体が覚えているのか、自然と出来た

さて、この少女はワタシの事を お姉と呼んだ

なので、この子はワタシの妹なんだろう、あとワタシとメツチャ似てるし

此処までソツクリなのに、赤の他人とかドッキリとしか言えない

そんな事を推理していると、妙齢のワタシと少女に似た女性と初老のガタイの良い男性が入って来た

「ああ弾、良かった」

妙齢の女性が寄ってきて、少女ごと包む様に抱きしめてきた

なんか凄く暖かく、安心し、懐かしい

「弾、お前が庇った一夏のボウズは無事だ」

初老の男性は、優しい眼をしてそう言うってくる・・・のだが、まず一夏が誰かが分からない

ボウズって事は男なんだろうけど

「水を差す様な真似をして申し訳ありませんが、彼女について重要なお話があります」

今迄空気を読んで見守っていた医者が、ワタシの思案顔に気付いて口を開く

「重要な事、ですか先生」

初老の男性が緊張した面持ちで医者を見て尋ねる

「弾さんは、現段階で記憶を失っている様です。詳しくは検査をしてみなければ分かりませんが、原因は頭部の強打 及び 緊急処置と治療による物と推測されます」

医者は淡々とワタシの症状について話す

それを聞いた面々の表情は芳しくなく、ワタシがどんな有様だったかは予想できる

かなりエグい有様だったんだろう

こんな有様な自分を客観的に捉える事が出来るのも後遺症の1つなんだろうか？

「・・・もしも、もしも記憶が戻らなくても、この子は・・・弾は私の娘です。これからも支えていきます」

妙齢の女性が、医者へそう言つてワタシを抱きしめる力を少し強める

「そうだ、弾は俺達の家族だ。自分を省みず家族に心配を掛けたがダチを命掛けで助けたんだ、立派だと俺は思っている」

初老の男性がワタシの頭を少し強めに撫でてくる・・・少し痛いけど、これにも懐かしさと安心を覚える

「お姉、もう無茶しないでよ？絶対だからね！」

ワタシの胸に頭をくっ付けて少女が言う

「分かった」

ワタシは、家族に恵まれている様だ

こんなにもワタシを想ってくれる家族が居るなだから

「諸々の検査とリハビリを明日身体始めて行こうと思います、よろしいですか？」

医者は何処となく満足気に尋ねてくる

「はい、宜しくお願ひします」

妙齢の女性が医者に向き直り頭を下げる

家族の為に、明日から頑張らないとな

### 3話 ふーあむあーい から始まるナンタラカンタ ラ 3

妙に雲が少なく青空が広がる今日この頃

昨日分かった事が、かなり有った

1つ目、ワタシの名前が五反田 弾という事

女兒に付ける名前じゃ無いと思うが、母さん曰く あんまりにも元気に腹を蹴るから男児だと思い、男の名前しか考えていなかったらしい、改めて考えて欲しかったが今更だ

2つ目、昨日来た妙齡の女性が母さん、ワタシにソックリな少女が妹、初老の男性が爺ちゃんとの事

まあ薄々は予想していた

3つ目、ワタシは親友(男)と事故に巻き込まれ、親友を庇い大怪我を負って半年くらい寝ていたらしい

それだけ寝ていれば筋力も衰えるだろう、しばらくはリハビリだ  
そして4つ目、ワタシの記憶は文字の読み書きと一般常識とかは有るが人との記憶など、思い出が抜け落ちている様だ

これは致し方無いとは思いますが、蘭(妹)を悲しませてしまったので、少し辛い

以上が昨日分かった事の全てだ

まあ大きくだが

そんな訳で、リハビリのノルマをこなして病室でノンビリしていると、壊れんばかりに扉が勢いよく開く

「昨日タマ、目が覚めたって聞いて昨日は外せない用事があったから無理だったけど今日は急いで来たんだ!!」

黒髪の少年が入って来て、ワタシの側に半泣きで寄ってくる

うん、気持ちは嬉しいけど、せめてソックくらいししようぜ?

あと凄く近い

「一夏、昨日とは言え目が覚めたばかりの人に詰め寄るな馬鹿者」

そう言つて、少年に似た美人な女性が少年の頭を鷲掴みしてワタシから引き剥がす

「ち、千冬姉、割れる、割れるって!!」

「すまんな?・タマ」

痛がる少年・・・一夏を話し、女性・・・千冬さんがワタシに言う「いえ、大丈夫です。ですが・・・」

ワタシには2人の事が分からない、だから少し辛い

「大凡は蓮さんと 厳さんから聞いている・・・一夏を助けてくれて、ありがとう 私は君のお陰で唯一の肉親を失わずに済んだ、本当にありがとう」

そう言つて千冬さんは、ワタシに歩み寄り膝を折つてワタシの手を包む様に手を握る

「ワタシがお役に立てたなら本望です、千冬さん」

ワタシは少し微笑み彼女に言う

「タマ、あの時はありがとう、お前のお陰で今も元気に生きてる、でも代わりに お前に怪我させてしまつてゴメンな」

そう言つて一夏がワタシに頭を下げる

「一夏頭を上げて欲しい、知つてると思うけどワタシには記憶が無いんだ。だから君の事、ワタシの事、君とワタシの友達のを教えて欲しい、良いかな?」

ワタシが そう言うで一夏は頭を上げて、強く頷いて

「分かった、任せてくれ」

なんとも頼もしい顔をしていた

「今日は来れて無いけど、鈴も明日は来るって言つてたから楽しみにしとけよ?」

「うん、期待しているよ?・一夏」

それから時間が許すまで一夏&千冬さんと話をした

早くリハビリを終わらせてしまおうと、目標を定めて頑張る決意をしました

## 4話 ふーあむあーい から始まった後のナンタラ カンタラ 1

一夏がワタシのお見舞いに来てくれてからヒト月と少しが経ち、日常生活を送りながらも大丈夫な程度にワタシは回復し、退院を迎えた

あの日から一夏は暇を見つけは足繁くワタシの病室を訪れ、時には鈴と数馬も共に訪れてくれた

記憶は未だに戻る兆しも無いが、過去に縛られるのもアレなので思いつく事を新しく作る事にした

そんな訳で、退院するので病院を出るとエプロンドレスの様なワンピースを着た千冬さんと同世代の美人と一夏と母さんが立っていた「アレ？今日は人に会う用事が有るって昨日言っただけ？」

退院する今日来れないと、昨日お見舞いに来てくれた一夏が言っていたのを思い出し、尋ねる

ついでに、母さんの表情がやや硬い気がする

「そのつもりだったんだけど、お前に会ってみたって言い出してき？俺の無茶なお願いを叶えてくれた人なもんで・・・」

一夏にとつて千冬さん並みに頭が上がらない人な訳か

まあ十中八九、一夏の隣に立ってワタシを値踏みしてそんな見方をしてる美人さんだろう

「どーもこんにちは、私が君の命の恩人、束さんだよ」

ニコニコと母さん笑みワタシに手を振る束さん

そんな子供っぽい事は、どうでもいい

今、この人は何て言った？ワタシの命の恩人？

この人は医者なのか？いや、見掛けで人は判断出来ないけど

「と、言うところ」

詳細が分からないとマトモな反応も出来ないので、尋ねる

「それはね、君がいつ君を助けてくれたから、束さんが瀕死の君を仮

面ライダー的な感じに蘇生させてあげたんだよ？ブイブイ」

ダメだ、さっぱり分かん

「えーっと、タマが俺の変わりに大怪我して死に掛けた時に束さんが偶然近くに居たんだ、それで俺が束さんに治療を頼んだんだ」

ダブルピースをしている束さんを見て首を傾げているワタシにー夏がフォローを入れてくれたので理解する事ができた

「束さん、ありがとうございます」

「いーよいーよ、私の可愛い弟分を助けてくれたしお願いだったからね」

なんか掴み所が無い人だな、束さん

「そうは言っても命の恩人ですし・・・」

とわ言え、ただワタシの術後経過を見に来た訳じゃ無いだろう

何か思惑がある筈だ

「実は束さん少し困ってて、タマちゃん束さんの助手にならない？」

やはりか何をするかは分からないが、命の恩人に恩を返すには丁度良い

「分かりました、違法じゃなければ可能な限り助手をさせていただきます」

母さんの表情が硬かったのはコレのせいか とか考えながらワタシは二つ返事で助手を引き受ける事にした

## 5話 ふーあむあーい から始まった後のナンタラ カンタラ 2

先日、東さんからのスカウトを受けてから現在拠点にしているらしい東さんの生家、篠ノ之神社へ毎日足を運んで助手を頑張っているとりあえず通い始めて数日は篠ノ之神社の地下にある研究所の掃除をして綺麗に整理整頓をした

どうも東さんには生活スキルが備わっていないかつたらしい

助手を欲しがっていた一因だと思う

今までどうやって生活をしていたのかが、凄く気になるが・・・知らぬが仏な事も有るので聞くのも怖い

そんな感じの日々を過ごしていた、ある日の事

「タマちゃん、ちよつと新型ISのテストに付き合ってくれないかな？」

実験や研究で掃除した先から散らかす東さんが、唐突にワタシへ言ってくる

「ISに、ですか？」

ワタシと東さんしか、この研究所に居ない上にワタシは一応、助手なので仕事の内と言えるが

「東さん、ワタシはISの搭乗経験も搭乗に必要な知識も有りませんよ？」

正直、大丈夫とは思えない

「あくそつか、そうだね」

そう言っただけで東さんは腕を組み思案顔をして唸り始める

「まあーちーちゃんも初めて乗った時に簡単に乗りこなしてたし、大丈夫大丈夫♪」

サムズアップして言ってくる東さん、正直正気を疑いたくなるが、まあ即死じゃなければ再び東さんが助けてくれるだろうと自己納得しておく

「千冬さんと同列にされても困りますが、東さんが　そう言うなら異論は有りません」

「うんうん、それじゃくやろく」

ワタシの言葉を聞いた東さんがポーズを決めて指を鳴らすと床の一部が2 m四方窪み、扉の様に開いて床がせり上がってくる

「さくさく乗って乗って♪」

東さんに続き隣に並ぶと、ゆっくりと床が下に下がっていく

なるほど、エレベーター的な装着の様だ、流石　東さんだ

数十秒程掛けてエレベーターで降りると、やたら広い空間が目の前に広がっている

「神社の地下に、こんな空間が有ったんですね」

「うん、此処で最初のISの調整とか実験をしていたんだよ？」

そう言われてみれば、壁と床に無数の小さな傷が有るのが分かる

なんか、ISの歴史の原点に立っているのは考え深いかも知れない

そんな訳で実験機に乗る前に、今主流になっている第二世代IS

ラファール・リヴァイヴで搭乗経験を積む事になった

「なんかスク水ニーソみたいな格好で、なんか心もと無いですね、これ」

ISスーツを着た率直な感想を口にする

「まあ慣れかな？うん」

確かにそうかもしれない、と自分を納得させておく

それじゃ、命の恩人の期待に応えられる様に、さっさとリヴァイヴ

を乗りこなして、実験機に乗って役に立とうと意気込む

## 6話 ふーあむあーい から始まった後のナンタラ カンタラ 3

リヴァイヴに搭乗し基礎訓練を開始してから数週間で束さんから合格を貰う事が出来た

どうやらワタシには適性と才能は備わっていた様だ

それから実験機に搭乗し、実験を繰り返す事になった

勿論四六時中という訳じゃない、学校へはキチンと行っていたし、

一夏や鈴と遊ぶ事も有った

それでも多くの時間を研究所で過ごしていたのは事実だ

休日や連休の時は夜通し調整と実験を繰り返すとかをやったし

そんな愉快的な生活を続けて1年が経過した頃、鈴が中国に転校してしまった

親友と別れるのは悲しいし寂しかったが、再会を約束して彼女を見送った

そして、鈴との再会は大して時を要さない気がする

そんな訳でワタシは中学生三年生へと進化を果たし、進学を強く意識する様になった

将来的には実家の食堂を継ぐのも有りだと思う、なら料理や調理の勉強が出来る学校を見つけるのも良いかもしれない、高校で無くても専門学校だって有るし、高校三年をフルに使い自分がしたい事を考えるのも有りかもとか色々と考えていたら束さんに呼ばれ

「タマちゃん、実は頼みたい事が有るんだ」

珍しく真面目な表情で、そう言われた

「何をしたら良いですか？」

出会ってまだ1年程度だけど、あの束さんが鬼気迫る表情をしているのは初めての事、それだけ重要なのだろう

「実は箒ちゃんが来年ISS学園に入学させられるらしくってね？私の所為で色々ISSに思う所が有ると思うし、ISS学園はある種の治外

法権な場所だからトラブルとか有りそうなんだ、だからタマちゃんに  
箒ちゃんのサポートをお願いしたいなーなんて・・・」

束さんに妹が居て、その妹は一夏の幼馴染なのは 束さんや一夏か  
ら聞いていた

確か要人保護プログラムだったか？

それにより箒は転校を余儀無くされたとか

ま、答えは決まっている

「構いませんよ？ I S 学園にも、少し興味も有りますし」

I S 学園に居る間で、やりたい事が見つかるかも知れないし I S 関  
係の職に就くのも有りだと思うし

「ありがとう!!タマちゃん!!」

ワタシの言葉が余程嬉しかったのか、ワタシに飛び付き持ち前の邪  
悪なクツションを押し当ててくる

普段はあまり意識していないが、こう密着状態に有ると少し・・・  
ほんの少し、羨ましいと思う

そんな訳でワタシの、目指せ I S 学園合格!!な計画が始まった

なんか、実験機をベースにワタシに専用機を作ってくれるらしい、  
これは束さんの期待を裏切る訳にはいかないな

とりあえず平日は束さんを講師に、3時間の座学と束さんが作成し  
実験機に搭載された仮想訓練装置を2時間

休日は半日を座学と実機訓練に費やし、受験への準備を進めた

7話 ふーあむあーい なワタシと束さん とアノ娘 1

受験勉強を始めて3ヶ月弱が経ち、今は夏休み真っ只中だ

毎日受験勉強を頑張っているお陰で、仮想訓練装置での成績は鰻登りに成長していると束さんからお墨付きを貰う事も出来た、でも気まぐれで千冬さん並みの仮想敵を出現させたりするのは辞めて欲しい

それと専用機が完成して晴れてワタシも専用機持ちの仲間入りを果たしたので、実機訓練は専用機で行っている

そんな感じで、2時間程の実機訓練を終えて専用機の紅雀を解除してシャワー室でシャワーを浴びていると、勝手に扉が開き

「タマちゃん、ドイツに旅行に行こう?」

「構いませんけど、濡れますよ?」

少し飛沫で湿り始めている束さんにいう

せめてシャワーから出てくるまで待てなかったのだろうか?

「わーい、準備は出来てるからね?」

「分かりました、少し待ってて下さい」

言うが早いか、束さんはシャワー室から姿を消した

天真爛漫と言うか無邪気と言うか・・・我が妹の蘭の方が精神年齢が高い気がする

まあ裏表ないのは良い事では有ると思うけれど

そんな訳でシャワーから上がり服を着て髪までキチンと乾かして髪を整えてから束さんの待っている部屋へ出向く

「それで束さん、ドイツに旅行は本気みたいですね」

部屋に入り、チラリとソファァで寛いでいた束さんの足元を見て尋ねる

「勿論だよ」

サムズアップしている束さんを見て少し不安になる

アノ束さんが、只の観光をする為に旅行にワタシを誘ったりしないだろう

なら、ワタシに何かをさせるか、手伝わせるつもりかもしれない  
「そうですか、分かりました。家に連絡して準備をして来ますね?」

「大丈夫だよタマちゃん!!荷物なら束さんが用意したから♪」

そう言っただ束さんは足元のポストンバッグをワタシへ差し出す

「なるほど、了解です。家に連絡だけはしますね?」

「うん、なら私は変装も兼ねて着替えて来るね?」

そう言い、私室へ入って行く束さん

ワタシは、その隙に携帯で家に電話を掛ける

数コールで家族が出たので

「もしもし?弾だけど」

『あ、お姉?どうしたの?』

電話に出たのは蘭らしい、なので

「母さんは居る?ちよつと話が有って」

『お母さん?今は買い物に出てるけど?どうしたの?』

どうやらタイミングが悪かった様だ

なら仕方ないか

「じゃあ母さんに、ワタシが旅行に行ったって伝えておいて?日数までは分からないけど、長くても夏休みが終わる迄には帰って来るつもりだから」

『うん、分かった。お土産期待してるね!』

「了解」

それだけ答え電話を切ってポケットにしまう

何かあっさりと話が進んだな...少しは説得的なのをするかと思っただのに

まあ良いか、後で母さんに事後報告をしておこう

そんな訳で、ワタシは束さんを待つ為にソファアに腰を据えた

8話 ふーあむあーい なワタシと束さん とアノ娘 2

照明が少なく薄暗い通路をワタシと束さんは、ISとは違う紅いナニカを纏い突き進む

アレ？ドイツに旅行をしに来た筈のワタシは何で研究施設に浸入してるんだらう

えっと確か・・・ああそうそう、人助けだっけ

流石に身元がバレたら厄介だからって、束さんが気紛れで開発していたパワードスーツ、ファフナー・テイターンモデルに搭乗して2人で研究施設を強襲している所だった

飛行は出来ないけど、滑る様に高速移動は可能なので助かっている  
まあ今回は屋内移動が主なので、不自由はないけど武装に関しては、やや不安要素が残る

剣銃式プラズマライフル、ガンドレイクが1つに、右腕部ライトマシガン2門、左腕部マイクロミサイルランチャー4門のみとなっている

文句を言っても仕方ないので頑張る事にしよう

「02、もうすぐでアノ娘が居る場所だよ」

「02了解、現在レーダーに敵影無し」

施設に浸入する時に数機のISと小競り合いをして以降、敵らしい敵と遭遇をしていないので不審に思いつつレーダーを確認しながら束さんに返答する

「此処だね」

「ワタシは此処で待機して警戒を、01はアノ娘の救出を」

「分かった、お願いね？」

辺りを警戒しながら束さんへ言うと、束さんはファフナーを解除し、アノ娘が居るであろう研究室へ入って行く

一応、動体センサーと振動センサーを見る限りはアノ娘は1人の筈

だけど

とか考えていたら先程小競り合いした人達が接近して来ているのをレーダーに捉える

「01、敵影が此方に接近中、どうしますか？」

「了解、説明と説得が終わったから、今から離脱しよう」

東さんの返事を聞き、ワタシは敵影の反応がしている方を向き

「行つて下さい、ワタシが背後を護ります」

ガンドレイクを構え東さんがアノ娘を構えているのを横目で確認し言う

「分かった、行くよ？」

再びファフナーを纏い、アノ娘を片手で抱き、猛スピードで研究施設の外を目指し始める東さんの後に続き、ワタシもバックで着いて行く

だが、敵影も自分の家たる研究施設の構造を理解しているのでワタシ達以上のスピードで迫ってくる

「仕方ない、背に腹は変えられない」

ワタシはバック走を続けながら、マイクロミサイルを一斉掃射し、天井を崩して通路を塞ぐ

これなら多少の足止めは期待出来る筈だ

とは言え、突入時には簡単に退いた彼女達が再び現れた訳

恐らく、ワタシが向かう出口には待ち伏せをされている可能性が有る

なら、作戦を変更するべきか？いや、ワタシが考えつく事を東さんが考えていない訳が無い

そう考え、とりあえず東さんに着いて行く事にした

9話 ふーあむあーい なワタシと東さん とアノ娘 3

アレから逃走を続け、何とか屋内から出ると案の定、待ち伏せをされていてしつかりとIS10機の包囲が完成していた

ワタシと東さんはファフナーに乗っているから多少は大丈夫だけど、東さんが救出したコノ娘は違う

入院着の様な薄い服を1枚しか着ていないので、文字通り紙装甲だ  
「01、ソノ娘を守りながら中央突破出来ますか？」

プライベートチャネルを開き東さんに尋ねる

「ん〜少し厳しいかな？私は兎も角、コノ娘が無事じゃ済まないと思う」

東さんは困った様子で答えてくれた

それに早くしないと、追跡して来ているISが追い付いてしまうので、あまり考えている暇も無い

「確か、このテイターンモデルは地上戦機ですが、水中でも活動出来ましたよね？」

ワタシはレーダーとマップを確認しながら東さんに聞く

「うん、出来るけど・・・まさか」

東さんもマップを見て気付いた様だ

「比較的深い河の様なので、河を泳いで逃げましょう」

然程遠く無い場所に河が有るのを見つけたワタシは東さんに進言する

これが通らなかつた場合、最悪ワタシが囮になって死にたくは無いが自爆するしかないかも知れない

「・・・分かつた、幸いテイターンモデルはパワードスーツの割に隙間が有るからコノ娘も小柄だし多分行ける」

良かった、進言が通った

「なら、ワタシが一旦逆方向に突っ込みますから、包囲が薄くなった場

所から脱出して下さい」

マイクロミサイルの再装填設定を最速に変更しながら束さんに言い、ガンドレイクを構える

「分かった、でも直ぐに離脱してね？」

「了解、行きます」

マイクロミサイルを一斉掃射して、ライトマシンガンでワザと撃つて誘爆させ煙幕代わりにし、そのままライトマシンガンを撃ち続け、河とは逆方向へ突っ込んで包囲を崩す

その隙に束さんはアノ娘を装甲内に招き入れ、猛スピードで離脱をしていく

それを追おうとする敵機も居たが、ワタシは迷わずスラスタ部へガンドレイクのプラズマ弾を放ち機動力を奪う

「貴女達の相手はワタシです、余所見をしていたら・・・死んでしまいますよ？」

再装填が完了したマイクロミサイルを再び掃射し、迎撃をされている内に、ガンドレイクで1番近くに居た敵機のマニピュレーターを切り落とし武装を強制解除させて蹴飛ばして遮蔽物の代わりに使い、別の敵機に近付き顔面にライトマシンガンからの弾丸をプレゼントして怯んだ所で頭を鷲掴みにして盾代わりにしつつ背後の敵機のライフルをガンドレイクで撃って破壊する

なんとも泥臭い戦い方だと思いつつ、束さんの離脱が完了するまでの時間を稼ぐつもりでいる

あと1人か2人ほど、戦闘不能にしたらワタシも離脱をしようと思う

10話 ふーあむあーい なワタシと束さん とア  
ノ娘 4

「美味しいね？タマちゃん、クーちゃん」

束さんが地酒的な感じのビールを片手にフランクフルトみたいな太いソーセージを食べて楽しそうに言う

「美味しいですね、やっぱり本場って奴ですかね？」

ワタシもソーセージを食べて束さんに同調する

「初めて食べましたが、確かに美味しいです」

クーちゃんコト、アノ娘と呼ばれていた娘、クロエが言う 因みに束さんの趣味なのか良い所のお嬢さん風の服を着ている

今、呑気に夕食を食べている間もクロエとワタシ達の搜索は続いているのだろうか、束さんの作略で大丈夫らしい

さて、アレから予定通り2名を戦闘不能にして戦域を離脱しようとしたら一瞬の隙を突かれて左腕を破壊されてしまつて正直焦つたが、ガンドレイクで何とか牽制をして全速力で河に逃げ込んで、光学迷彩を起動させて河底を這う様に撤退をして、何とか逃げ切つて束さんと合流し概ね成功した事を祝して夕食を食べている

「束さん、あんまり呑むと明日が辛いですよ？」

もうジョッキで何杯目か分からない程呑んで出来上がっている束さんに一応、忠告しておく

「え〜大丈夫だよ〜ね〜クーちゃん？」

「え？あの、はい」

クロエに抱き付いて頬擦りして言う束さんに、対応に困っているクロエ

「束さん、クロエが困ってますから、水飲んで下さい水を」

そんな感じでクロエから剥がしてテーブルの お冷を束さんに飲ませて、お会計を済ませて1人でマトモに歩けなくなっている束さん

に肩を貸してクロエを連れてホテルへ向かう

「と、まああまり締まらないけどさ、これからよろしくクロエ」

「はい、よろしくお願い致します。弾様」

何か久しぶりに本名で呼ばれた気がする、気のせいかな？

一応東さんも何か言ってるはいるんだけど、何語か分からない言葉になってるから気にしないでおこう

そういえば、東さんって何歳なんだろう？

ビール吞んでたし成人はしてる筈だけど・・・

まあいいや覚えてたら明日にでも聞いてみよう

今は東さんをベッドに輸送するのが最優先だ

それから何とか東さんをベッドへ送り届けて、クロエに開いているベッドを使う様に言うのと異議申し立てをしてきたが、どうにか丸め込んで、ワタシは結っていた髪を下ろし照明を消してからソファアーになって目を閉じる

まさかドイツに来て人助けをするとは予想もしていなかった

しかも研究施設を襲撃して救出っていう

本当、人生なにが有るか分からないモノだ

明日は、ドイツ観光をしたいなあと考えてつつワタシは眠りについた

11話 ふーあむあーい なワタシと真夏と親友と

照りつける真夏の太陽、滴る汗、鳴り止まぬ銃声、遮蔽物に当たる弾丸と跳ね返る音、両陣営からの止まぬ雄叫び

ワタシは、ワタシ達は、最高の夏を、夏休みを満喫している正に青春だ!!

「あだつつヒット」

テンション上げて調子に乗ったら敵さんにキルされてしまった

ワタシはオーバーキルされない様に手を上げながらヒットコールドをして自陣地へ戻る

ドイツ旅行から帰って来てから一週間が経ち、ワタシ達は未成年（18歳以下）でも参加が出来るサバゲーイベントに参加している

ちやんと、受験勉強はしているので安心して欲しい

東さんと蘭も誘ったが、東さんはクロエを1人にしたくないと言い、蘭は友達と約束が有るらしく断られてしまった

致し方ない

そんなこんな自陣地へ戻ると、一夏が給水していた

「相手さん、上手い人が結構いるや」

そう言いワタシも自分のボトルを持ち上げ、ストローを下げて中身を飲む

「だよな〜もう3回キル取られたよ俺」

そう言っ肩をすくめる一夏

まだ開始5分だぞ〜一夏、3キルは多いよ

まあワタシもキルされた身ですが・・・

「数馬は?」

マガジンとトイガンのチェックをしている一夏に、親友2号の事を尋ねる

「多分、奮戦してるんじゃないか?最初キルされた時に別れて以来だし」

一夏は再出撃の準備が出来た様で、カウンターを押して復活して駆け足で前線を目指して行つた

「ワタシも補給しよつと」

ワタシはバックから事前に用意して置いた装填済みのマガジンをマガジンポーチに差し込んでいく

撃ち切つたら、リロードをする時に地面に落としゲーム終了後に回収する様になっている

あくまで個人の感想だけど、その方が楽しめるのだ

一応、目印はしてあるから間違われる心配は少ない

さて今回のゲームは無限復活制のフラッグ戦となっている

無限復活制とは文字通り、キルされても自陣地に戻ればリスポーンが出来る

フラッグ戦とは両陣営にフラッグ、つまり旗を設置し奪う為に両陣営が進行と防衛をし合うゲームだ

因みに旗とは名ばかりで、敵陣地のブザーのボタンを押せば勝ちとなる

あと無限復活制なので制限時間が設けてあり、今回は制限時間30分になっている

未成年も多数居るし真夏だからだろう、多分

そんな訳で、ワタシは補給を終えて最後に水分を摂取しストロールを巻き直して、一応流れ弾に気をつけつつ敵フラッグを求め前線を目指す為に身を屈めながら遮蔽物に身を隠し進む

前に読んだマンガに、『死なない殺し合いを始めようか』と書いてあったのを今思い出して、またテンションが上がった

## IF話 ふーあむあーい だった私と彼の未来の話

青々と広がる快晴の空から、惜しげも無く陽の光が降り注ぐ7月7日の昼下がりの五反田食堂

漸く昼のラッシュ時を抜けて、遅めの昼食を取るために余り物を集めて用意している

「タマ、あまり無理するなよ?」

余り物を、お皿に盛っているとトイレから戻って来た一夏が心配そうに近寄って来た

「一夏、心配し過ぎだよ」

「そうか?でも、お前だけの身体じゃないんだから」

そう言っただけの大きくなった お腹を撫でてくる

そう、ワタシは妊娠中なのだ、現在8カ月で もう時期臨月になるワタシが記憶喪失になってから早十余年、東さんのお願いで、IS学園に入学し様々な事件や出来事が起こった

その過程で、ワタシも一夏も何度か死に掛けた事も有った

だが、ワタシ達は仲間と協力し その悉くを打破して今と言う未来を掴み取った

あの朴念仁の一夏に休日のアル日、呼び出されて告白されたのは、亡国機業の一件が解決した2年の末頃だった

その行動は、大いに周りを驚愕させ 鈴は号泣しながら祝福してくれて、箒には暫く睨まれ続け、シャルロットは時々本気か冗談か分かり辛い表情と声量で2番でも良いかな とか呟いていたし、ラウラは真正面から一夏に異議申し立てをして一夏が頑張って説得をしていた

セシリアは巻いていたコロナヘアが衝撃の余りストレートになり立ったまま失神していたっけ?

あと千冬さんが暖かく祝福してくれて、蘭も泣きながらも祝福して

くれた

それからワタシと一夏は順調に清い交際を続け

一夏は生徒会長、ワタシが副会長を務め 一夏はモンドグロッソに向けて日々精進をして

2年からは整備課に所属していたワタシは、東さんからの技術教育を生かし、白式の整備と点検 調整をすると言う感じだった

それから無事にIS学園を卒業して、一夏は2年の頭辺りで代表候補になっていたので、日本代表になる事を目標に代表候補や整備士が集まる大学みたいな場所に進学し、翌年に日本代表に選出され更に翌年、第4回モンドグロッソで優勝を飾りブリュンヒルデ、そしてジークフリートの栄冠を手に入れて、翌年にワタシ達は入籍を果たした

それが5年前の事で、一夏は第5回モンドグロッソを優勝し、今は現役を続けながらIS学園で補助教諭をしている

実はワタシもIS学園で整備課の教員をしていたのだが、今は産休を取って実家に戻っているのだが、ジツとして居られずに家業の食堂を手伝っている

一夏も心配なのか、暇を見つけては五反田家に来てくれるので、助かっている

「そうだ、名前はとうしようか？」

昼食の準備が整ったので、テーブルに運び一夏に尋ねる

今まで幾度も話して来た内容では有るが、尽きないのは初めての子供故にだろう

「そうだな、男ならーーーー」

映像が途切れる様にノイズが走り目の前がホワイトアウトした

ーー・・・無限に広がる分岐の果てのなれ果て・・・ナニかを選び、

ナニかを選ばなかった、その先にアル未来

枝葉は延び無限の可能性を指し示す

観測者の諸君、君らはナニを観測する？

傍観者の諸君、君らはナニを傍観する？

選択者の諸君、君らはナニを選択する？  
願わくば、より良き観測と傍観と選択を  
未来は無限である――

12話 ふーあむあーい なワタシとナントカヤラ

1

楽しい夏休みが終わり、2学期が始まって文化祭の準備の為に放課後に生徒会の手伝いを頼まれたので生徒会室に来ている

「で？ワタシに何をさせるつもり？シンク」

学年1・2位をキープしている見た目チャライ赤毛のシンクに尋ねる

「ん？いやあく生徒会で出し物しなきゃなんねーじゃん？だから助っ人をな？」

軽い調子で言ってくるシンクに

「助っ人？まあ構わないけど・・・」

文化祭には束さんと呼ばうか考えつつ

「出し物は何をするつもり？」

「メイド喫茶」

ワタシの質問に、珍しく真顔でシンクが即答する

とりあえずガチっぽいと思い、生徒会の奥で書類仕事をしているシンクの兄であるグンジョウを見る

「シンクは本気みたいだよ？」

青髪の子ケメンであるグンジョウがシンクとは対照的に苦笑を浮かべて言う

「正気かシンク？メイド喫茶って事は」

ワタシもメイド服を着る事になるのだが、シンクかグンジョウが裏方をするとして、どちらかが女装をすると言う事

「どっちかが女装するんだよな？」

ワタシは割と真顔でシンクに尋ねる

「ん？あー・・・グンジョウ、お前がやるか？」

「ヤダよ、僕は裏方の仕事が良い」

何かシンクは考え無しに言っているらしい

少し呆れつつ

「ワタシとシンクで接客、グンジョウが裏方をするとして……3人じゃ少し厳しいんじゃないか？」

実家が食堂を営んでいるのでワタシには少し人数が不足している様に感じる

最低でも接客が2人、裏方が1人……欲を言えば2人は欲しい所だ

そこまで考えて、ワタシは閃く

「一夏を裏方に引き入れよう、アイツなら頼んだら引き受けてくれそうだし」

「ナイス、タマ」

「確かに一夏のスキルを有効活用しない手は無いいね」

2人から了承を得る事が出来たので、早速一夏へ電話をしてみる

確か今日バイト休みの筈、今の時間帯なら家か買い物途中だろう

そんな感じで数コール鳴り

「どうしたんだ？タマから電話なんて珍しい」

確かに普段はメールかLINEで済ませる事が多いから珍しいかもしれない

「実は頼みたい事が有って」

「頼みたい事？」

一夏の言葉に一拍相槌を置き

「生徒会が文化祭でする出し物がメイド喫茶なんだが、少し人数が足りてなくてな？一夏に助っ人を頼みたいな」と

まあ元々はワタシも助っ人なんだけどもね？

「え？まさか俺にメイド服を着て接客しろと？」

あの説得なら勘違いしてもおかしくはないかもしれないけど、と一夏の少し引いた声を聞きつつ考え

「いやいやいや、一夏には裏方……つまり厨房関係を頼みたいと思ってる。まあお前がメイド服を着たいなら止めないけど」

多分一夏ならイケると思う、うん

そんな感じでワタシは一夏と交渉を続けた

13話 ふーあむあーい なワタシとナントカヤラ  
2

アレから愉快的な仲間を集めて準備を整えて文化祭当日を迎えた  
流石に生徒会室で出店する訳にはいかないのです、空き教室を借りて  
掃除と設営を行い、そこでする事になった

「それじゃ今日1日、頑張ろう」

既にワタシはメイド服を纏い、愉快的仲間一同に言う

「おう、裏は任せろ」

裏方担当の、一夏が気合い充分に言い

「本当に接客をしなくていいの?」

ワタシと同様にメイド服を纏い金髪ツインテールで手に客寄せの  
看板を持っている加賀谷家三姉弟の長女シャナが不満気に言い

「んじゃ、頑張ろうぜ?」

ワタシと同様にメイド服を纏い、肩口まで有る自前の髪を後ろで  
結っている加賀谷家次男のシンクが気軽に言い

「本当は裏方が、良かったをんだけどな・・・」

ワタシとシンク同様にメイド服を纏いエクステで増毛してサイド  
テールになっている加賀谷家長男のグンジョウが溜息混じりに言う

「辛気臭いぞ?グンジョウ、中学最後の文化祭だぞ?楽しもう?」

「そうだぜグンジョウ?今変更は無しだぜ?」

ワタシとシンクがグンジョウの左右から励まし(?)グンジョウの  
モチベーションを上げる

「そう、だね。分かったよ」

ワタシ達の説得でグンジョウもヤル気になったので良しとしよう

「それじゃ、目指せ1位!!」

ワタシの言葉に皆が強く頷いてくれたので、頑張ろうと思う

そこに文化祭の入場開始の放送が鳴ったので

「それじゃ、とりあえずワタシ達は お客さんが来るまで待機、シヤナ頼んだよ?」

ワタシはシヤナにチラシの入ったトートバッグを渡し言う

「任せて!!」

そう言いシヤナは意気揚々と教室を出て行った

「大丈夫かな?」

「大丈夫だろ」

「大丈夫じゃないかな?」

シヤナは、やれば出来る子なんだけど・・・天然て言うか抜けてる  
と言うか・・・少し心配になる奴なのだ

あとグンジョウ、それは どっちの意味なんだ?

そんな訳でメイド姿のグンジョウ&シンクを目当てに来た人とか  
で次第にテーブルが埋まって行き、待ちも発生し始めたのだが、記憶  
にはなくても物心付いた頃から実家の食堂の手伝いをしていたワタ  
シに捌ききれない事は無く、順調に接客をする

途中、他校の不良的な奴が絡んで来たがワタシとグンジョウで撃退  
し、拘束して教師陣へ引き渡したりした

そんなこんなで、午前の部の終了が告げられる

「結構混み合ったね?」

「だな、腹減ったわ」

そんな雑談をしながら裏からお弁当を持ってきて、適当なテーブル  
を囲み昼食を開始する

午後の部も繁盛しそうだと思いながら、母さんお手製のお弁当に舌  
鼓を打った

14話 ふーあむあーい なワタシと受験戦争 1

惜しくも出店部門第2位で終わった文化祭から数ヶ月の月日が流れ、ワタシ・・・否、ワタシ達は今戦場へと向かっている。

受験会場と言う名の戦場に

「それにしても一夏と受験会場が同じとはね？」

「だな？不思議な事も有るんだな」

ワタシが受験するのは言わずもがなIS学園

一夏が受験するのは、学費が安く就職率が高いと言われていた藍越学園

名前は似ているが似て非なる物、なのだが・・・何故だか受験会場が同じで少々キナ臭さを感じる

とはいえ、ワタシの予感だけで一夏の受験を妨害する事は出来ない  
ので心の中に秘めておく事にする

「にしてもタマはIS学園か、あんま遊べなくなるな？」

「全寮制だもんね、寂しい？」

普通の人なら勘違いしそうなセリフだけど、朴念仁で鈍化な一夏は勘違いなんてしない

少なくともワタシ達の間恋愛感情なんて存在しない

「遊び仲間が減るし、お前には返してない借りが有る」

一夏は、まだワタシが庇った事を気にしているらしい

「何度も言ってるけど、気にしなくていい」

気にされてもワタシには庇った記憶が無いから実感が湧かない  
とりあえず一夏の背中を軽く叩き歩を進める

それからしばらく歩いていたが、終始一夏は不満気だった  
それから目的地の独特な構造をした市民会館に到着し玄関ホール  
で

「んじゃ一夏、頑張れよ」

「おう、タマもな」

お互いに励まし、拳を合わせて自分の戦場へと向かう為に背中を向け左右の通路に別れて進む

IS学園の倍率は、それこそ数百倍を超える学校なので、世界各地で分散し筆記試験と実技試験を行うのだが受験者数が多いので、半々を前後に振り分けて行われる

最初は実技試験なので、その会場へ地図を見ながら進む

「分りづらい構造だな・・・一夏は大丈夫だろうか？」

普段迷子にならない1人でも迷子になりそうな構造なので、ふと一夏が心配になった

「まあ大丈夫か、地図さえ見れば迷子にはならない筈だし」

最悪IS学園の受験会場区画に迷い込むかも知れないけど、問題にはならない筈

「・・・何か嫌な予感がするな」

最近よく嫌な予感が当たる様になった気がする

どうも夢見も悪く、一夏がISを動かしてしまう夢を見たりした事も有ったが、考え過ぎだと思いつい誰にも言わず自分の胸にしまったままにしてある

「まさか・・・ね、ある訳ない」

胸の内がモヤモヤとしながらワタシは試験会場の中に入り、受付をして受験番号と実技試験のルールが書かれたプリントと学園指定のISスーツを貰い更衣室へと向かい着替えを始める

「今は、そんな場合じゃない。よし」

とりあえず目の前の実技試験で高評価を得てからモヤモヤの事を考える事にした

15話 ふーあむあーい なワタシと受験戦争 2

気持ちを切り替えISスーツを纏い受験番号の名札を付けて待機室に移動し、ルールと用意されているISのチェックを行う

今回用意されているISは現在主流の第2世代IS、打鉄とラファール・リヴァイヴの2種類で、受験者が選び搭乗する様だ

ルールは制限時間が15分、予め登録されている武装を使い試験官と戦う

つまり実技試験は、試験官のSE（シールドエネルギー）をどれだけ削れるか、試験官からの攻撃にどう対処するかを見る様だ

暫く確認をした後、ワタシは目を閉じて精神統一をする

1つ1つ頭の中のスイッチを入れて行く様に集中する

それから数分後にワタシと数名の名前が呼ばれ、実技試験の会場へ係員の先導で向かう

5分と掛からずに会場に到着し

「では、五反田弾さんはAコートになります」

「はい」

係員の指示に従いAコートへ向かうと、整備員の人に声を掛けられた

「貴女、希望は？」

「ラファール・リヴァイヴを、お願いします」

「分かったわ」

数機有るラファール・リヴァイヴの1つの前にタラップを押しに来て

「乗ってちょうだい？」

「はい」

ワタシはタラップを上がりラファール・リヴァイヴに背中を預ける

様に乗り込むと空気が抜ける様に簡易的なフィッティングが行われ情報が空間投影される

「SE規定値、システム異常無し、武装チェック・・・異常無し、オールグリーン。行けます」

端から端までチェックし、整備員に言うのと凄く驚いた表情をしていたが、直ぐに持ち直し

「コートに入って？あとは試験官の指示に従えば大丈夫よ」

「分かりました、ありがとうございます」

ガシヨンガシヨン言わせながらコートに入ると、試験官であろう人が待っていた

「五反田さんですね？それでは実技試験を始めたいと思います、よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

頭を下げ、登録されているマシンガンを左右に1つつつ展開し構える

試験官がアサルトライフルらしき物を構えると開始のブザーが鳴る

ワタシは即座に右へホバー移動をするとギリギリを弾丸が通って行ったので、両手のマシンガンのトリガー引き、試験官へと攻撃を開始するが簡単に避けられる

やはり一筋縄には行かない様だ

それに試験官を出来るということは、それなり以上の実力者という事だ

にしても、この試験官は偏差射撃が上手い・・・移動先を読まれて撃ち込まれて、ワタシは対物シールドで弾丸を弾いている状態だ

しかも余裕の有る微笑みを浮かべているので、手を抜いているのもよく分かる

流石に癪なので、一矢報いる為に策を考える事にした

16話 ふーあむあーい なワタシと受験戦争 3

実技試験が始まって5分弱が経ち、残り時間も9分強となっているが、未だに有効打を与えるには至っていないのだが、そろそろ仕掛けて行こうと腹を括る

銃撃が当たらないなら近付いて斬るだけだ

対物シールドを前面に出しイグニッション・ブーストをして一気に距離を詰めて試験官にデイスティション・アタックをし、体勢が崩れた所にマシンガンを接射してSEを削る

が、やはり試験官は直ぐに体勢を整え、ナイフを展開して対応してくる

ワタシもナイフを展開して、離れない様に取り付いてインフアイトへ持ち込む

それから何度も刃を交え、SEを規定量削る事が出来た

やはり乗り慣れないラファール・リヴァイヴでは満足行く動きが出来なかった

そう考えつつラファール・リヴァイヴを整備員の人に返し、ワタシは更衣室へと向かう

「あの試験官、強かったな・・・ドイツで戦った人達より」

多分あの人達は色々と胡座掻いてたんだろう、じやなきやワタシみたいな子供に負ける訳がない

そんなことを考えている内に更衣室に辿り着いたので、中に入りISスーツを脱ぎ、制服を着て髪を整えからダツフルコートと鞆を手に持ち更衣室を出て筆記試験の会場へ向かう

「あれ？何か騒がしいな」

仮にも実技試験をしているので、銃撃線とかになるので騒がしいのは当たり前なのだが、それとは違う感じがするので発生源へと向かう  
少しだけ移動すると、一室の中から様々な声が飛び交っているのが

聞こえた

「何だろ？」

ワタシは少しだけ開いていた扉の隙間から中を覗くと、忙しく動く整備員の人達と、打鉄を纏いオロオロとしている親友の姿が見えた。「え?え?!一夏?」

眼に映る光景が信じられなくて、思わず声を出して、うっかり扉を開いてしまい、一夏と目が合ってしまった

「た、タマ!!助けてくれ!!」

「無理だよ、どうしろと?」

ワタシを認識した瞬間に助けを求めて来た一夏に断りを入れ、少し考える

一夏を助ける方法・・・ん?何から助けたらいいんだ?

「一夏、助けるって何からだ?」

「何からって、この状況からだよ!!なんで俺はISに乗ってるんだ?」かなり混乱している一夏がワタシに尋ねてくるが、ワタシに分かる訳がない

「知らないよ、ワタシが聞きたいくらいだよ」

兎も角、一夏はとんでもない事をしてくれた

今までの常識を覆してしまう程のだ

政府や今まで虐げられてきた男性陣は喜ぶ事だろうし

過激な女尊男卑主義者には目障り極まるだろう

これは束さんに協力して貰った方が良さそうだ

流石に親友がモルモットになるのは見過ごせない

## IS学園入学後

### 閑話 ぷろふ

名前\*五反田 弾(ごたんだ だん)

愛称\*タマ

CV\*小林沙苗

性別\*女

身長\*162cm

体重\*no data

備考\*紅い髪と深紅に近い色をした瞳を持つ少女にして、本作の主人公、だいたい某神喰いの おでんパンをこよなく愛している少女の様なケモ耳な髪型をしている

過去の事故に際し親友一夏を庇い瀕死の重傷を負い、偶然事故現場の近くにいた篠ノ之束により一命を取り留める

しかし事故の後遺症により記憶喪失となっている

現在は割と前向きに過去より未来と考えている為、あまり気にしていない様子は無い

また、篠ノ之束により ナニカ されている

篠ノ之束 曰く、仮面ライダー的な事 をして有るらしい

その為か、チート級にハイスペックで適性はS

機体名\*ファフナーティターンモデル改 マークドライツェン

世代\*第3世代型競技用IS

待機状態\*ドッグタグ・ネックレス

兵士の方々が身に付けているヤツ

銀色で1枚目に弾の血液型等の情報、2枚目にISの名前と人參の

刻印がされている

武装（固定）＊

|| 腕部軽機関砲 ||

前腕部に備え付けられたライトマシンガン、片腕に付き2つ装備されている

使用時に銃口の装甲（蓋）開放し射撃を行う

牽制や密着時に役に立つ

|| 超振動近接ナイフ ||

手首から手の甲側に向けて展開する仕込みナイフ

仕込みナイフなので、大きくは無いが充分な長さが有り密着時に役に立つ

|| レーザリングカッター ||

ワイヤーカッターで射出し敵に巻き付け熱溶断が出来る様になっている

過熱のオンオフが可能

武装（後付け）＊

|| ガンドレイク ||

剣銃型可変式プラズマライフルで、独特な形をしており、射撃時には刀身が縦に割れ、射撃を行う

正しい使い方は、突き刺した後に刀身を展開し射撃を行う 又は普通に構えて射撃 or 斬撃を行う事

手持ち武装なのでアンロックすれば誰でも使える

|| イーゼス ||

光学シールドを張り、実弾・レーザー・ビーム等を防御する事が出来る装備

アンロックユニットとして装備可能なので、汎用性は高い

特殊機能＊ジークフリート・システム

ISコアが形成するコア・ネットワークシステムの上位機構で敵味方の区別無く情報を搾取し、リアルタイム・オペレーションを行えるその為、広い視野・柔軟な思考・即応能力・マルチタスク等を持ち合わせていないと戦闘しながら指揮をするのは難しい

また僚機が居なければ十全な能力を發揮出来ない

単一仕様\*「閲覧不可」

単一仕様は発現していませんが

現在、閲覧をする事が出来ません。

備考\*篠ノ之 束が弾の為に用意したフルスキンの専用機

以前のクロエ救出作戦時に使用した機体を強化改修し現行機以上のスペックを生み出した

前は飛行が出来なかつたが、IS機能を付加しバーニアスラスタを増設し機動力を強化されている

またマイクロミサイルはオミットされ、代わりにレーズングカタールを追加してあり、より近距離戦闘型になっている

外見的イメージはマークドライツェンにテイターンモデルの背部スラスターとマークザインみたいなスラスターを増設しているイメージ

またドライツェンの名の如く、13番機である(意味深)

17話 ふーあむあーい なワタシと親友♂の高校  
デビューー 1

季節は桜舞う春、ワタシは無事にIS学園へ合格する事が叶い、自分の在籍する1年1組で目の前の席に座って居心地悪そうにしている親友♂の背中を眺めている

「大丈夫か？一夏」

一夏の背中を軽く突き話し掛けると、やや混乱したままな表情で振り向く

「た、タマ〜助けてくれー!」

拜む様にワタシへ言ってくるのだが、ワタシにはどうする事も出来ない

「助けてやりたい所だが、無理だよ。ごめん」

肩を竦めてそれだけ言うと、丁度先生が入ってきた

「さ、一夏 耐えるんだ」

「お、おう」

軽く一夏の肩を叩き、前を向かせる

それから先生の姿を観察してみる

緑の髪をしたボブカット、やや大きめな眼鏡を掛けて童顔で、成人している様に見えないが、胸部装甲はワタシの数倍は有る…ちよつと羨ましい

あと、さつきからワタシに殺気を送ってくる束さんの妹の筈は、何なんだろうか？

まあいいか、その内分かるだろうし

そう思い意識を先生に戻すと少し涙目になっていたが、先生は気を取り直してクラスメイトに自己紹介を促す

あと一夏は見るからに余裕なんて無いので、自己紹介を聞いてはいないだろう

またトラブルを起きそうだ・・・そんな嫌な予感がする

それから暫くして一夏の番になったが、一夏の耳に入っていないらしく、頭を抱えて微動だにしないので先生も困っているのです、一夏の背中をポンポンと軽く叩き

「一夏、お前の番だぞ?」

ワタシの言葉に意識が戻ったのか顔を上げる

「え?あ・・・」

「織斑君、自己紹介をお願いします」

「は、はい」

一夏が立ち上がり振り返り少し顔を引き曇らせる

まあこれだけの視線に晒されたら誰だってこうなる

更に言えば自分以外は女子生徒で、一部の生徒を除いて見知らぬ人なのだから

一夏は腹を括ったのか、深呼吸をしてから

「えー・・・織斑一夏です」

それだけ言い、再び口を閉ざす一夏

そして、ほぼ無音で教室の扉を開け気配を消し入室してくる千冬さん

レディーススーツを着ていて、かなり出来る女性に見えてカッコイイ

その千冬さんは手にナニカを持って一夏の背後に立つ

「以上です!!」

千冬さんに気づいていない一夏が漸く口を開いてそれを言うと、千冬さんは手に持ったナニカで一夏を叩く

「いづつっつ」

一夏は、叩かれた場所を押さえ振り向き

「げえ!!本多忠勝!!」

それを言った瞬間に、もう一撃見舞われ あまりのダメージに一夏は蹲る

「誰が戦国最強の一角だ、馬鹿者」

千冬さんは大袈裟に溜息を吐き

「で？お前はマトモな自己紹介も出来んのか？」

手に持ったナニカをチラつかせながら千冬さんが言う

何か凄くカッコイイ

18話 ふーあむあーい なワタシと親友♂の高校  
デビューー 2

アレから一夏は3回ナニカの餌食となり、千冬さんは一夏を座らせて口を開く

「私が、このクラスの担任、織斑千冬だ。私の仕事は貴様等ヒヨッコを1年で使える様にする事だ、私の言葉には逆らうな、逆らっても良いが相応の覚悟をしろ。いいか？私の言葉には全てハイで答えろ」

何処かの鬼軍曹を彷彿とさせる物言いだ、これ位が丁度良いのかも知れない

千冬さんのキャラ的にも、ISを扱う者としても

そんな訳で千冬さんの自己紹介がされた瞬間、四方から黄色い悲鳴が響き渡りワタシの耳にダメージを与える

「全く・・・毎年毎年、よくもまあ集まる」

黄色い悲鳴を、その身に受けている千冬さんは毎度の事らしく慣れた様子で軽く愚痴り

「静かにしろ、自己紹介の続きを・・・五反田からだな？始めろ」

千冬さんの一喝で静かになり、ワタシの番になったらしいので素直に立ち上がり

「えーつと・・・五反田 弾です、男子の様な名前ですが、ちゃんと女です。趣味はサバゲーと身体を動かす事と料理です、これから宜しくお願いします」

とりあえずテンプレートな自己紹介をして千冬さんを見ると、どうやら合格らしく軽く頷いていたので座る

それから次々とクラスメイトの自己紹介が続き、最後の人の自己紹介が終わって

「これで全員終わったな？では貴様達には先ず基礎の基礎を座学で1週間程、学んで貰い、その後の実機での授業になる。大まかなスケ

ジュールは各自配布してあるスケジュール表を確認しておく様に、  
上だ。では授業に入る、山田先生」

「は、はい、それではテキストのロー」

そんな感じで授業が始まり、ワタシは指定されたテキストのページ  
を捲り見る

基礎の基礎と言うだけ有って、ISへ携わる人にとっては、一般的  
な常識と一般常識に毛が生えた程度の内容だった

初日だから軽いのだろう・・・一夏以外には

さつきから仕切りに首を傾げて左右をチラチラ見てたり覗いたり  
している

やはりもう少し一夏にISの勉強をさせておけば良かった

まあマトモに勉強何か出来る状況でも無かったのだが・・・

そんな事を考えつつ山田先生が挙動不審な一夏に気付き

「お、織斑君、ここまでは大丈夫ですか？分からない事が有れば言っ  
てください」

ニコリと笑み、一夏へ優しく手を差し伸べる山田先生に一夏は恐る  
恐る

「先生、聞いて良いですか？」

「はい、なんでしよう？」

山田先生は嬉しそうに一夏に尋ねると

「全部分かりません」

「そう言い切った

「え？全部ですか？」

流石に山田先生の予想の範疇を超えていた様でワタワタとし始め  
た

あと千冬さんの眼光が、更に鋭くなったのが分かった

君に幸あれ、一夏

19話 ふーあむあーい なワタシと親友♂の高校  
デビューー 3

事前に必読だったテキストを捨ててしまい千冬さんに少し無茶を言われた波乱の1時間目が終わり、一夏は机に頭をつけてグツタリしている

「お疲れ一夏、親友のヨシミで少しは助けてやるよ」

一夏の前に立ち、そう言う

「本当か？サンキュ、タマ」

少し回復したらしい一夏が頭を上げて言う

「にしても一夏、流石にテキストを捨てちゃダメじゃないか？」

少し呆れつつ言うと、一夏は気まずそうな表情になり

「仕方ないだろ？古い電話帳だと思ったんだよ」

まあ確かに、下手な電話帳より電話帳な厚さをしているけれど

「電話帳サイズなのは否定はしないけどな、まあいい」

箒が意を決したらしく立ち上がったのを確認したワタシは一旦言

葉を切り、彼女をチラツと見て一夏の肩を軽く叩き自分の席に座る

「ちよつと良いか？」

「ん？おう」

一夏はワタシに何で肩を叩かれたか分からないらしくキョトンとしながら箒と共に教室を後にした

それはそうとして、何かワタシを遠巻きに観察するのは止めて欲しい

確かに一夏とは親友であるが、決して恋仲ではない

とはいえ初日で出会って数時間程度、それを分かれとは言えない  
不可能に近いから

クラスメイトと仲良くなるには少し時間を掛けないとダメみたいだ

やれやれ、また嫌な予感がしてきた

これ以上のトラブルは勘弁して欲しい、また一夏絡みだろうし

そんな事を考えていると、2時間目の予鈴が鳴り少しして一夏と箒が帰って来た

「久しぶりの幼馴染との再会、どうだった？」

「なんか、怒られた」

そう言い不思議そうにしている一夏を見て、何となく察する

いつものアレだろうな、と

「そうか、なら昼でも誘ってみたらどうだ？」

「そう、だな。サンキュ、タマ」

そんな話をしていると、始業の鐘が鳴り山田先生と千冬さんが入って来て千冬さんが教卓に立ち、山田先生が端に控える

次は千冬さんが担当する様だ

「授業を始める前に、クラス代表を決めるのを忘れていたので、決めたいと思う。我こそは、と名乗りを上げる者はいるか？」

千冬さんは教室を一瞥して

「居ないか、では他薦で決める事になるな」

そう言い、千冬さんはワタシを凝視してくる

千冬さん、ワタシは また悪さしてません。する気もありません、だからワタシを凝視しないで下さい

まあ千冬さん的にはワタシにやらせたいんだろうな、多分

うん、やりたくない。これ以上目立ったら箒のサポートをし辛くなるかもしれない

そんな訳で、ワタシは硬い意識で千冬さんからのプレッシャーを耐え、行く末を見守る

20話 ふーあむあーい なワタシと親友♂の高校  
デビューー 4

そんなこんなで行く末を見守っていると、クラスメイトの大半が一夏推しを表明し、かなり賑わい出す

すまない一夏、今回はお前を人柱にさせて貰う。後で何か奢ってやるから

そんな事を考えいると、漸く一夏が現実を受け止めたのか立ち上がって

「お、俺？なんで?!」

「黙れ、立つな馬鹿者」

そう叫ぶ様に言うが、千冬さんに出席簿(件のナニカ)で叩かれ再び座る

「良いか織斑、推薦された以上やれ。いいな?」

ギロリと一夏へ言う千冬さん・・・止めて、そんな事を言ったら一夏なら絶対にワタシを推薦するじゃないか

「そ、それじゃあ タマ・・・じゃなくて、五反田さんを推薦します」

「おま、一夏・・・やってくれたな」

さつき何か奢ってやるって言ったが、騙して悪いな・・・アレは嘘だとか考えながら後で一夏を殴ろうと心に誓う

と、言うか千冬さんが 満足気なんだが・・・

やはり嵌められたらしい

く・・・千冬さん、恐ろしい娘!!

はあ、1人コントは辞めにし・・・

「推薦が2人になりましたけど、どう決めるんです?」

あわよくば多数決投票にならないか期待しながら千冬さんへ尋ねると、後ろの方で机を叩く音が聞こえ

「納得出来ませんわ!!」

金髪ロールの如何にも貴族令嬢なイギリス人のセシリア・オルコツ

トが異議を唱える

「五反田さんは兎も角、入試時に主席合格を果たした わたくしを差し置いて、其方の何処の馬の骨かも分からない男をクラス代表に据えるなど、わたくしに1年もの間 苦痛を味わえと仰るのですか？」  
はつきり言つて、理解が追い付かない

何か急に演説的なのを始めたと思えば、一夏を貶し始めるし、馬の骨の使い方が合ってるのか？って感じだし

苦痛を味わう事については、知らんがな

だが下手に口出しはしないでおこう、嫌な予感がする

「只でさえ後進的な国で生活する事になつてに、これ以上は耐えられませんか」

うん、やつぱり意味が分からない

クラスメイトのほぼ全てがポカン顔なんだが・・・

あーでも、そろそろ一夏が口を滑らしそうだな・・・嗚呼嫌な予感がする

「イギリスだつてメシマズ何連覇してんだよ」

やつぱダメだったか、うん。分かつてた

「あ、貴方!!イギリスを馬鹿にしていますの!!」

「先に馬鹿にしたのは、お前の方だろ？」

仕方ない、援護するかな

「二人共ストツプだ、まず一夏？イギリスにも美味しい物は一杯ある、次にセシリア・オルコット 確か君はイギリス代表候補だった筈だ、その君が他国を貶すと少々問題が起こるんじゃないかな？それに日本はISを開発した国だよ、訂正して貰おう」

一夏を宥めて落ち着かせてオルコットへ訂正を要求する

これで丸く治れば良いな、うん

21話 ふーあむあーい なワタシと親友♂の高校  
デビューー 5

結論から言つて普通に丸く治らなかつた

オルコットが逆ギレして決闘をしろと言ひ始めた、困つたな・・・  
仕方ない

「オルコット、それが何を意味するかは分かつてるんだよな？」  
確か決闘は両者が合意したら出来る筈だ、まあ日本では法律で禁止  
されているのだが

此処はIS学園、どの国の法律も及ばない治外法権の地だ  
とりあえず、ワタシなりに凄みを出してオルコットに尋ねる  
「勿論ですわ、それとも怖気付きましたの？」

ワタシ達を嘲笑する様な感じで言うオルコットに噛み付きそうな  
一夏を手で抑えて

「そう、なら良いよ？決闘の方法はワタシが決めて良いよね？まさか  
自分が提示する内容で決闘を申し込むつもりだった何てないよね？  
ねえ？」

そう言いオルコットを煽ると凄く悔しそうにしているのだ

「あと、お前に死ぬ覚悟はあるのか？人を殺す覚悟はあるのか？無い  
なら決闘は取り消せ、有るなら命を掛ける」

ツカツカと歩み寄りオルコットの胸倉を掴んでメンチを切つて言  
うと軽く怯えた目でワタシを見ている

「さあ、決めろ。今決めろ、自分が生きる為に他人を殺すか他人を生か  
す為に自分を殺す決闘をするか、否かを」

メンチを切りながらオルコットに選択を迫ったら、頭を思いつきり  
叩かれた

「いだっつっ」

「やり過ぎだ馬鹿者、手を離して席へ戻れ」

「はい」

振り向けば千冬さんだったので、叩かれた場所を摩りながら自分の席に戻り座る

「オルコットも座れ、くだらん喧嘩は放課後にでもしろ。今は授業中だ、クラス代表を決める為に来週の月曜放課後にクラス代表決定戦をする。織斑、五反田、オルコットの3名は各々準備しておけ、以上だ」  
オルコットを座らせ、教卓へ戻り それだけ言ってテキストを開き「授業を始める、テキストの8ページを開け」

何かモヤモヤした感じを残しながら授業が始まったので、とりあえず目の前の授業に集中する事にした

それからなんだがと無事に授業が終わり、昼休みになったので、軽く伸びをして道すがら一夏の肩を軽く叩き小声で

「さ、箸を誘ってメシでも食いながら謝って来いよ」

それだけ言い、何か言いた気な一夏を放置して食堂へ向かう

にしても、やっちゃまった・・・ちよつと熱くなってしまつてクラスメイトに引かれた感がパナイ

あとオルコットの胸部装甲は少し羨ましい

ちよつとポツチな気分を味わいながら食堂に辿り着き券売機の横にあるメニュー表を眺める

「やっぱ多国籍学園なだけあって多種多様な料理が有るな・・・」

余りに多種多様なので少し迷いつつ、放課後どうしようか考える

22話 ふーあむあーい なワタシと親友♂の高校  
デビューー 6

そんなこんなで午後の授業を乗り越え放課後になったのだが、一夏は机に突っ伏して屍になっている

「しっかりしろ一夏、お前にでも分かる様にワタシが教えてやるから」「うぐう・・・マジか？タマ」

若干やつれて見える一夏が頭を上げ、此方を向く

「マジだよ」

それから一夏に分からない所を聞き噛み砕いて説明し覚えさせる作業を夕陽が射すまで続ける

元々のスペックが優秀なので、1度理解し始めればトントン進み、其れ程の苦労も無く進んでくれた

「それじゃ、今日はこれ位にしておこう。暫くは自宅からなんだろう？」事前に話しを聞いていたので尋ねつつ鞆に教科書を入れていると

「ああ織斑君、まだ残っていて良かった」

山田先生が現れ、一夏に用があるみたいだ

「実は織斑君には今日から入寮して貰う事になりました」

「え？調整とかで暫くは自宅通学って聞いてたんですけど・・・」

確かに急に言われれば誰でも、そう思う

「えっと・・・織斑君の身の安全と負担を考慮した結果、と言ってますた」

山田先生は、少し誤魔化して一夏に答える

多分一夏をモルモットにして研究をしたい奴等の動きが活発化したんだらうな

まあ真実はワタシには分からないんだけどね

「あー・・・それじゃ1回、家に戻って荷造りをしないとダメですね・・・」

一夏が少し困った表情で言うと

「安心しろ、私が用意して来た」

千冬さんが現れて、ボストンバッグを差し出してくる

「あ、ありがとうございます。」

一夏の表情が、かなり複雑そうなのは理解出来る  
多分、自室の有り様を心配しているのだろう

「では私達は会議が有るから行く」

「これがお部屋の鍵です、くれぐれも無くさないで下さい。無くしたら自腹で鍵交換になります、では道草しないで帰って下さい」

そんな感じで千冬さんは、山田先生を引き連れ教室を去って行った

「・・・行こうか」

「お、おう」

そんな訳でワタシは一夏と共に寮へと向かうのだが、ワタシ達の後ろ・・・否、一夏の背後を大名行列みたいに女子が続く

本当に一夏が珍しい様だ

それから何かが起こる訳でもなく寮へ到着し廊下を進み

「そういえば、部屋は何号室？」

「えーっと1025だな」

1025か、普通にワタシとは違う部屋だ

ワタシの部屋は1024だから多分隣の部屋

「んと・・・どこか」

一夏は部屋を見つけた様で扉に手を掛けていた

「ノックぐらいしろよ、1人部屋とは限らないんだし・・・って、おい」

ワタシの制止も聞かずに部屋に入って行く一夏

嫌な予感がする、だが お前がワタシの制止を聞かないのも悪いんだぞ？

23話 ふーあむあーい なワタシと親友♂の高校  
デビューー 7

内心呆れていると、一夏が出て来て扉の前に へたり込む

「一夏、またか？」

「た、タマ・・・助けてくれ」

ワタシを見上げてくる一夏に歩み寄り

「えーい」

一夏の頭を足の裏で踏む感じで横に移動させると、木刀が扉を突き破ってワタシの脚ギリギリを通過する

「危な・・・今のは当たったら流石の一夏でも危なかったな？」

木刀が中に戻る前に掴み脚を一夏から離して言う

「流石のって何だよ・・・」

「大概頑丈じゃん？お前」

とか馬鹿話をしつつも、ワタシは木刀で綱引き擬きをしている

相手は、なかなか力が強いので

「で？一夏、お前はラッキースケベをして尚且つワタシに助けを求めたんだよな？木刀の主は誰だ？」

こんな直接的な事をする奴なんてワタシは鈴ぐらいしか？

千冬さん辺りならスルーしそうだな、うん

「箒だよ」

「箒って確か幼馴染の？ふーん」

パツと手を離し一気にドアの向こうに消えた木刀を確認し、ドアを少しだけ開けるとバスタオル一枚の箒が居たので閉じ

「篠ノ之さん、そのままじゃ風邪を引いてしまうから、早急に服を着てくれ」

「・・・・・・・・」

微かに彼女が動く音が聞こえたので服を着ているのだろう、多分それから数分と掛からず扉が開き

「・・・入れ」

凄く不機嫌そうに箒は言う

「はいなー」

「ちよつつタマ、何すんだ」

とりあえず一夏の襟首を掴み室内へ連行し

「いやあ、このバカが迷惑を掛けてゴメンな？一夏、正座」

「くう・・・」

一夏に正座をさせてペシペシ叩きながら箒に言う

「あ、ああ・・・」

何か戸惑っていた、何でだ？

「気持ちに分かるけど、木刀はマズいよ木刀は」

肩を竦めて彼女に言う、明らかに不機嫌な表情になり

「ソイツを庇うのか？お前は!!」

なんだろ、この娘は頭に血が上りやすい体質なんだろうか？

兎も角、沸点が低過ぎる

「ん？まあコイツに死なれたら困るし、ドアをブチ抜ける威力なら、軽く一夏の頭はザクロみたいになるだろうし？うん」

暗にワタシはやり過ぎと言いたい訳なのだが、傍らの木刀に手を伸ばしている箒には理解して貰えていないのだろうか

「ならば、貴様同罪だ!!断罪してやる!」

そう言い箒は木刀をワタシに振り下ろしてくるのだが、頭に血が上っているからか剣筋がブレている

避けるのは簡単なんだが、避けたら一夏に当たりそうなので避けないうで受け止めようと思、左手だけ部分展開しキャッチする様に木刀を受け止める

「危ないな・・・少し落ち着けよ、な?」

これで箒が落ち着いてくれれば良いが・・・無理っぽい、うん

何やってんだろワタシ

24話 ふーあむあーい なワタシと親友の準備期  
間 1

どうにかこうにか箒と話を付ける事が出来たので、一夏・箒部屋から出て隣の1024号室の扉をノックして中に人がいるか確認する  
「返事も音も聞こえないから居ないのかな？」

とりあえず中に入ると、未開封の荷物が1人分だけ有った  
「ワタシの荷物だけ、か」

何処かの天災兎の介入を感じるけど、まあいいや  
箒的には嬉しいだろうし？

多分、元々はワタシと箒が同室だったよな、うん  
そんな事を考えつつ制服から部屋着に着替えて荷解きを手早く済ませ、ベッドに仰向けで寝ながら来週のクラス代表決定戦について考える

セシリア・オルコット、彼女は強い。間違いなく強い

実力が無ければイギリス代表候補には成れないし、専用機を与えられる訳が無い

ならば、彼女について下調べをする必要がある

情報戦は既に始まっている

その点で言えばワタシと一夏は有利だ

何故なら公式な記録も情報も皆無に等しい、手の内を晒す必要も無い

さて、どうやって一夏をクラス代表にしようかな・・・

理想はオルコットにもワタシにも一夏が勝ち、ワタシは一夏には負け、オルコットには勝つパターン

これなら千冬さんも納得してくれる筈だ

でも、それは難しいだろう。何故なら一夏はド素人だからだ

ド素人が、なんの練習も無く代表候補に勝つなんて、フィクション

の中だけ

ならば、経験を積みませるしかないが、練習機の貸し出しは絶望的で、ワタシのISを貸す訳にはいかない

何故ならワタシの・・・否、束さんが作るISは思想からして違う  
通常の場合、例えば新開発された実験機があり、その実験機に適性  
や相性が良いモノを選定し専用機として与えられる

だが束さんの場合は、真逆で有り 搭乗者の適性や相性を見て、搭  
乗者の専用機を作る。つまり本当の意味で最初から最後まで搭乗者  
の専用設計し開発し完成されている

だから他人が乗っても実力を出し切る事は出来ない

「束さんなら一夏に専用機を送ってきそうだけど・・・」

そもそも一夏に送るなら箒にも専用機を送るだろうからワタシに  
何か言ってくる筈

それが無いって事は、まだ開発途中なのか、そもそも設計段階なの  
かは分からない

「困ったな・・・」

どうにかして一夏の経験値を稼ぎたい

何か閃かないかな・・・

「練習機はダメでも剣道とかさせれば或いは？」

現状で取れる最善の策だろう、多分

最悪 裏技を使って一夏の経験値を稼ぐけど、とりあえずは最善だ  
ろう

「そうと決まれば一夏と話し合ってこよう」

ベッドから降りて隣へ向かう為に廊下に出ると、女子達が隣を観察  
していたので、少し疲れてしまった

## 25話 ふーあむあーい なワタシと親友の準備期間 2

そんな訳で翌朝、結局マトモに一夏と会話が出来なかった

少し疲れが抜け切っていないのか怠い身体を動かし、寝巻きからジャージに着替え髪をポニーテールにして支度をする

健全な魂は健全な肉体に宿る、と束さんが言っていたので毎朝軽く走るのを日課にしている

春先なので、陽はまだ低く綺麗な紅を空に移している中を、無理せず ゆっくりと走る

日頃のトレーニングで重要なのは無理や無茶をせずに徐々に身体に慣れさせ高めて行く事

最初から、ハイレベルな事を出来る人は あまり居ない

30分程走り、ジャージの袖で汗を拭き部屋へ戻って軽くシャワーで汗を流し、身支度を整えて行き食堂へ向かう

廊下でクラスメイトに挨拶や軽く雑談をしつつ食堂に入ると箸と一夏を発見した

とりあえず、バイキング形式だったので和食セットを作成して一夏達の方へ向かい

「隣、いいか？」

「ん？ああタマか良いぞ？な、箸」

「ふん……」

ありや、機嫌悪そうだな箸。これはマズったかなあ……

とりあえず座り手を合わせ全ての食材と それに携わる人に感謝をして食べ始める

「この鮭、絶妙な塩加減で白米が進む。くっ……IS学園、侮りがたし……」

「お前、何やってんだ？一芸？」

場を和ませようかと思いい芸を披露したら一夏が呆れた表情でワタシに言う

「勿論、一芸だよ。箒ってば、不機嫌そうにばかりしてても仕方ないよ？笑ってる方が可愛いしさ？」

そう言うのと、箒が此方を睨む様に見てきた

「私は お前とは昨日が初対面の筈だ。何故お前にそれが分かる？適当な事を言うな」

「それはそうだけど、ワタシは一夏からアルバム見せて貰った事が有るしね？あ、アルバムを見た理由はちゃんとしてるから安心して？。あと束さんにもアルバムを見せて貰ったし」

ワタシの記憶が戻る手掛かりにならないかと一夏がワタシにアルバムを見せてくれた

結果は失敗で有ったが、幼い一夏は今以上に千冬さんに似ていて、まるで姉妹の様にも見えた

束さんについては、箒が産まれた時の話から始まり現在に至るまで延々と聞かされ、少し疲れたのを覚えている

そう言うのと箒の目付きが更に鋭くなる

「では理由を聞かせて欲しいな？」

何だろう？某背中に鬼の顔を持つ漢みたいオーラで周りが滲んでる気がする

「此処じゃ人が多いけど・・・まあ隠してる訳でも無いし良いか、ワタシは約2年前の目を覚ました日以前の記憶が無いんだ」

ワタシは肩を竦めて言うのと、箒は嘘だろと信じていない様子だったので一夏が口を開きそうだったのを手で制しておく

まあ信じて貰う必要は、あまり無いのかな？うん